

図9：自然への抵抗としてのエンジニアリングと芸術

*O
(図8)

- *1 自由エネルギーの最小化としての葛藤の解消の帰結として、人間は自然を予測可能なものとするために、
- ・自然についての知識を体系化し、
 - ・その知識に基づいて自然を制御する仕組みや制度などを構築する (= 「エンジニアリング」)。

- *3 エンジニアリングが持つダイナミズムは、
四つのディスクールを用いて表現することができる。

- *4 このダイナミズムは、
エンジニアリングによる捕獲を逃れる
不確実性としての対象aにより駆動される。

- *5 エンジニアリングがどれほど発達しようとも、
不確実性としての対象aが根絶されることはない。

- *7 不確実性と直面する機会を積極的に織り込むことで
エンジニアリングのダイナミズムを活性化させて、
より良い満足を生みだしていこうとする思想を
「アジャイル」という。

- *8 残留する対象aは
トラウマ的な体験として反復強迫するが、
それを「美的」に解消する試みが「芸術」である。

- *6 自然界において、
未来を厳密に予測しきることは
不可能であるため。

- *9 美的とは、
「将来における対象aの発生を防ぐための
エンジニアリング的機能を持たない」
という意味である。

*10

- エンジニアリングにおける主人のディスクールとは、
- ・新しく確立された視点や問題の枠組み ($=S1$) から、
 - ・さまざまな物事 ($=S2$) が規定され位置づけなおされていく ($=S1 \rightarrow S2$) 過程である。
 - ・主体 ($=\$$) は $S1$ を確立すること ($=S1/\$$) で不確実性を解消しようとするが、その他方で新たな不確実性が生まれる ($=S2/a$) 。
 - ・この新たな不確実性には、その視点に立つ限り解消できない部分が含まれる ($\$/a$) 。

*11

- エンジニアリングにおける大学のディスクールとは、
- ・既に確立された視点や問題の枠組み ($=S1$) に根拠を持つ様々な命題 / 仕組み / 制度など ($=S2/S1$) を、
 - ・ $S1$ に変更を加えないまま拡張していくことで不確実性を解消していこうとする ($=S2 \rightarrow a$) 過程である。
 - ・その過程は不徹底に終わるため、残存する予測誤差が主体 ($=\$$) を発生させる ($=a/\$$) が、
 - ・このディスクールに立つ限り不確実性の解消は一応作動し続けているため、主体は $S1$ に変更を取って加えようとはしなくなる ($=S1//\$$) 。

*12

- エンジニアリングにおけるヒステリー者のディスクールとは、
- ・自身が抱える予測誤差あるいは不確実性 ($=a$) の解決 ($=\$/a$) を、
 - ・既に確立された視点 / 問題の枠組み / 権威を持つ他者 ($=S1$) により達成しようとする試みであるが、
 - ・ $S1$ は有限の知 ($=S2$) しか生みだせず ($=S1/S2$) 、それが自身の不確実性を解決することはない ($=a//S2$) ため、
 - ・結果は $S1$ に対する失望に終わり、 $S1$ は手段としての信頼を失墜させる。

*13

- エンジニアリングにおける分析家のディスクールとは、
- ・自身がそれまで依拠していた認識 / 仕組み / 制度など ($=S2$) に帰結するうまくいかなさ ($=a/S2$) が眼前に現れる ($=a \rightarrow \$$) ことで、
 - ・主体はそのうまくいかなさの解消を目的とした新たな視点や問題の枠組み ($=S1$) を生みだすように思考を強いられる ($=\$/S1$) 。
 - ・新しく生み出された $S1$ は、それまで依拠されていた $S2$ とは整合性を持たない ($=S2//S1$) ため、速やかに主体は主人のディスクールへと移って世界の再構築が行われる。